<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>古田 榮作</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>大手前大学論集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>31-56</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2010-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://id.nii.ac.jp/1160/00000074/">http://id.nii.ac.jp/1160/00000074/</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
要

『ダンマパダ』「法句経」を通じて、仏教の根本思想を考察した。「ダンマパダ」（経典）が「ダンマパダ」の中でどのように説かれたかを考察した。仏教の根本思想となった「四法印」（諸行無常、諸法無我、涅槃寂静、一切皆苦）を考察した。仏教の根本思想の下で説かれたかは明らかにされていない。そこで各書籍に随伴する因縁談に学び、現在の信者指導のため、近代になってから日本で試みられた「仏教新運動」に関連のある「常磐大定の「仏陀之聖訓」」

キーワード: 論行無常、諸法無我、涅槃寂静、一切皆苦、公案、因縁談

古田榮作

（31）
This is the Way of Salvation.

Shut your eyes to the appearance of suffering, and the wisdom who perceives the path.

Purity.

"All conditioned phenomena are impermanent. When one sees this, one becomes weary of dukkha. This is the Path to Nibbāna."

Sūtra of the Pure Land, 32nd verse.
Shigfyewa becomes conscious of suffering.

With wisdom who perceived this, he
"involved in suffering are all existing things."

"Buddhist Legends" he said:

"The four noble truths: the truth of suffering, the truth of the origin of suffering, the truth of the cessation of suffering, and the truth of the path leading to the cessation of suffering."

..."The Dhammapada: the path to the cessation of suffering..."
This is the Way of Salvation.

If you perceive the suffering of life, you will understand the nature of suffering, which is described in the following paragraph.

This suffering is due to the ignorance of the nature of suffering and the ignorance of the way to overcome suffering. The way to overcome suffering is through wisdom and compassion.

With wisdom who perceive this fact, straighten becomes contemplations of suffering.
と、英訳している。漢訳では、
一行の行
如道之所見
若能覺此苦
行道淨其跡

この偈頌は「諸法無我」を示すものである。この「諸法無我」は、すべてのものは、因縁によって生じたものであって実体性がないと

いうこと。「三法印の一つ」とされ、「三法印」は、「仏教思想の特徴としての三種のするし、諸行無常と諸法無我と涅槃寂滅とをいう」

の死によって、心身ともに束縛を脱した境地。絶対の静寂、心の安らぎ。「迷いから離れた」理想の境地。迷いの消

すことが、吹き消し、煩悩を減ずることを説明されている。また煩悩のない心、煩悩の煩悩のない心、煩悩の煩悩のない心、煩悩の煩悩のない心、煩悩の煩悩のない心、煩悩の煩悩のない心、煩悩の煩悩

の死によって、心身ともに束縛を脱した境地。絶対の静寂、心の安らぎ。「迷いから離れた」理想の境地。迷いの消

のであつ。そこに世界が「因果」により構成されているという認識がある。

「五薬の一」生滅を観ないで、たとえ百年生きるよりも、「五薬の一」生滅を観ながら一日生き方が、よりすくされている。

「ダムパザ」と教育
この頃の関係において以下のような因縁絆が残されている。

サヴァティ（労働者の町）には裕福な商人がいた。この商人は息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少になる頃になる彼女にふさわしいと思われる青年との婚約をした。結婚の日取りを決める前に、娘は実家を出産した。息子が生まれた時に、娘は結婚を見直って実家を退いて実家と向き合った。結婚式は間近で進められたある日、娘は下僕と騒け落ちてしまった。若夫婦には息子と娘がいた。娘は深恵の令嬢として手厚く育てられ、夫婦は娘が年少にな
つける者さえいた。彼女はいつの間にか、仏陀の所にあるジェダヴァナ（Cetavāna）僧院の傍まで来ていった。その時、師「仏陀」は信者
に説法をしておられた。「聴聞し、仏陀の存在を認めた仏陀は「すぐ僧院のなかにいるように」とテレビを送られた。これを受けて彼女
は僧院に入り師に近づこうとした。信者は彼女を追い払おうとしたが、師は「この者が追い払ってはならぬ」と制して、彼女にやさしい言
葉をかけた。師の顔をじっと見つめていた彼女は、やがて正直を取り戻し自分が真実であることに気づき、しきのありそと場にう
ざくまった。ある信者はその上着を彼女に与え、それを縫った彼女は師の足元に寄り、五体投地をして「尊者よ、お願いです。お助け下さ
い。これからどう生きていったらよいのでしょうか？」バタバチャーラよ、安心するがいい。何よりも懸命に命を奪われ、風で頼りすがろうとした。

この話を聞いている人は、子供たちは願うならず、ただ彼女を親族といえども願うならず、友人縁者の所も庇護「所」と
はならず。この道が明かされた。

死神に襲われている人には、子供たちは願うならず、ただ彼女を親族といえども願うならず、友人縁者の所も庇護「所」と
はならず。この道が明かされた。
「五薫の」生滅を観ないで、たとえ百年生きるよりも、「五薫の」生滅について悟りを得た。そこで、佛陀は、佛陀、と説き明かされ、比丘尼は阿羅漢果を得たのである。後に佛陀はその真摯な修行を観て、「バーチャーラー」こそ比丘尼なかで戒律を厳守し修行に精進する点において第一である。と称賛されたのである。

バラクルーハラーに関する逸話がいさか長なくなったが、この傍批（13）は、日常生活の中の佛教世界観の浸透を通して、人々の心を五つ分類し、その構成を観察することで、無常・無我を理解することを悟ると述べる。五つの集まり、五つの集まり、五つの願、の意。バラクルーハラーは積み集められたもの、または別類別れされたもの、の意。人間存在、人間存在、人間存在、人間存在、人間存在、を構成する要素。

人間存在、そのもののあり方を、五つの面からみて、五薫を立てる。われわれの存在を含めて、あらゆる存在を五つに分類したものをいう。環境を含めた生存の心を五薫に分析したものです。色、受、想、行、識の五つである。（1）色（2）受（3）想（4）行（5）識は認識作用、識別作用、識別作用、識別作用、識別作用の五つである。

この五つは、色、受、想、行、識の五つの心作用を経緯する心の活動、大まかにいうと、物質性、感情性、表象性、意識性、形式性、力である。五つの心作用の全般を総括する心の活動、大まかにいうと、物質性、感情性、表象性、意識性、形式性、力である。五つの心作用の全般を総括する心の活動、大まかにいうと、物質性、感情性、表象性、意識性、形式性、力である。
いるものである。師が狂人となってしまった彼女を観て、狂乱の原因を察知し、温かい言葉をかけて、彼女に思案を促している。打ち水の地面への浸透を契機に「人生の無常」を語らしめるのである。

染宗で、人々のるべき言葉を表示するものに用い、具体的には祖師のこぶし・言句・問答などををさす。禅の課題。祖師が修行者を導いた行為を書き記したものの、仏道修行者の手引きとする。因縁話題ともいう。禅宗ではすぐに予期されるもののように動作などが記して、これを坐禅しようとする者に示し、考える対策をしたことを手がかりとして。因縁話題としての課題としての意義の提起と修行者の思索の深化を試みようとしているのである。

☆

教育の姿として、一つの文書を参照してみよう。言説戦争が勃発した。九〇四年に発行された常磐大殿の「仏陀之聖訓」は、その一章を関連の深い「出曜経」の章句が用いられている。

仏のたまじく、世の良薬の病を知り、薬を識るに四種あり、若し生じを具足せば名医とす。四識是なり。

「ダマンバダ」と教説(?)

「応病与藥」を病相、病原、病状、病根の四つを知り、それへの対処を薬、治療に求めている。
これに対応する「法教」が「四論」である。「四論」と同義である。「四聖論」四論はすぐれた神聖なものであるから聖

（40）
訓, 長老が新入門者の思索を励ますことをないようにした。師は、長老の部屋に到着しようとすると、長老は信者から布施として与えられた食物を携えていた。師は、時間稼ぎのために、長老と間答した。間答が終わっている間に、新入門者は、更なる高位の悟りである阿羅漢果に到達していた。

小柄な比丘ラクタ・パティヤ (Lakunata Bhatiya) は、常習師仲間の比丘たちに、耳や鼻をつねられ、からかわれていた。しかし、彼は決して怒るころがなかった。ある日、比丘たちが彼の忍耐強さを詰め寄していた時、師 (比丘・仏陀) は、阿羅漢果を決して怒ることではないと述べた。師のいうことを、教え子たちが共通するものである。これにより、世界大戦後には、『仏教の平和主義思想を示すダンマバダ』の思想が示されている。これにより、仏教の平和主義思想を示すダンマバダの思想を考桉する。

この世において実に怒りは怒りによって決して静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなということを静まることがない。怒りを待ち取るなうこと

この結婚の因縁説は次のようなものである。ある農家の息子が父親が死亡した後に、一家の大黒柱として仕事に精を出しつつ、残された母親の面倒をよくみて家庭を支えていた。母親は息子の結婚を急がざるをえなかった。息子は結婚の相手となる娘を見つけ出して、二人を結婚させた。ところが、この娘は不妊症であることがわかった。息子に結婚させることがないことを心配した母親は、健康な若き娘との再婚を息子に勧めたが、
「妻に満足している」として母親のいう再婚話には興味すら示さなかった。しかし妻には衝撃的な話であった。「夫はいつの日か母親の動

妻の食事にそっくり胎児を入れ、再婚を申し出た。前妻の方には、日が経っても再婚によって新婦に対する嫉妬心が増大するばかりであった。ある日、嫉妒にのっかった前妻は新

妻は前回と同じように新婚の食事に堕胎薬を入れ、再度、流産させた。新婚は毎日のように新婚に追い込まれ、護宅の役を果たした。前妻は毎日のように新婚の食事に

生まれ変わったのである。新婚の親友は親友が卵を生む度に取り上げて食べてしまった。親友は自分が生んだ卵を親友に食べられる度に悲しむ親友への復讐を誓つ

家としては、結婚した妊婦には子を助けてあげよう、親友に追い込まれ、親友の外にいる。しかしながらそのような縁を繋がるのかと諦め、最後の声掛けをする。

前妻はアーニャに「夜叉を連れて来るよう」「念せられた」と訴え、前妻は「すぐに夜叉を連れて来て」と言葉で夜叉

又は幸せを聞いた。前妻は母親に「この人を幸せに連れて帰る。毎日食事を与えなさい。」と命じた。母親は夜叉を連れて家に帰った。
が降るから」とか「日光が続いてから」と天候を予測し、母親の家だけが災害に遭わず多量の収穫を得ることができ、以後夜又は幸福に

本稿では、宗教における四法印が「ダバ」の中でどうのところに取り上げられているかを考察した。仏陀の指導の中には、弟子の瞑想を重視し、「仏陀の指導」というのは考えられない。因縁縄に示された瞑想の効果は、明確な課題を与えての瞑想・思索であったと言えるであろう。
Haschmnamer Karamiunn.

[H]ow [one] knows and sees this becomes passive on [passing] is the way that leads to purity. [p. 124]

[Max Mueller p. 124]

The Buddha taught, "All conditioned things are unsatisfactory. When one sees this, one leaves away from suffering. This is the path to liberation."


"All created things are eternal and pure, he who knows and sees this becomes passive in [passing] is the way that leads to purity. [p. 124]"
Eugene Watson, *Buddhism Valuable* (vol. 3, pp. 1-151)

"All forms of existence are unreal, meaningless, because the one who perceives the truth of this gets disgusted with this world of suffering. This is the path to purification." (Buddhahantop. 65)
Five hundred life is one life, and a hundred years is one day. It is better to live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things. 

Buddha's Fifth Precepts

passion undeviating

Brahmin's Julin Senyo

go, as passionless live

五剎那五百年

If one is to see the rise and fall of things, he should live five hundred years without ever seeing the rise and fall of things.
Better it is to lose one day seeing the Supreme Truth than to live a hundred years without ever seeing the Supreme Truth. (Buddha, trans. at p. 40)

Who, does not perceive the origin and cessation of things,

A single day’s life of one who clearly sees the origin and cessation (of all composite things), is better than a hundred years of life of him

Max Muller

(Sanskrit: मॅक्स युलियर)
Through hard battles, Hardest are never appeased; through non-hardened are hardened always appeased - and this is a law eternal. (M. Müller, op. cit.)

For hardened, harried cats by harried, any time hardest cases by love, this is an old rule. (M. Müller, op. cit.)

Handsome and

"Handy by hard's been practiced yet, in all creation. Through hard do's harm be subside: This law is of access duration."